

(有)仁開商事

沖縄県知事(第三七三三)号
EL 82-0362



徳島県の糖業家・中川虎之助による大規模な開墾と製糖作業のために、四国を中心に300人余が農業移民として名蔵に入植したのが明治29(1896)年。そのときに徳島県から移住した仁開家の4代目、一夫さんと文さん親子。昭和63年にそれまでの靴店から転換した不動産業「仁開商事」の前で。

徳島県からの開拓移民たち

島の商業の根幹をつくる

石川市の中心地にある石川地区で不動産業の「仁開商事」を営む仁開一夫さん(57)は、徳島県から移住した開拓移民の4代目である。「大正期、移民2代目である祖父父母の時代に、農業をやめて町中へ出てきたんです」机の上に七色ア色の写真を並べた。戦前の「仁開洋服店」や戦後の靴店「仁開商店」。それに平成時代の新しい「仁開商事」。どの写真にも写っているのが、12年前に96歳で他界した一夫さんの祖母のミサワさんだ。夫の正一氏の死後、女手一つで3人の子と

昭和初期の石川町の商店街。明治・大正期には鹿児島出身の客留商人が多く、中川虎之助が率いた四国出身の入植者が目に出て、商業を始めたケースも多かった。仁開商店もそのひとつ(写真・石川市教育委員会市史館提供)。



士族たちで、明治25(1892)年に市街地北方のシーナ原を開墾した。次いで、徳島県の糖業家・中川虎之助による名蔵平野の開墾。中川の呼び掛けに応じた同郷の移住者70人の中に、仁開一家もいたのである。

しかし、石川島は昔から「ヤキー(マラリア)の島」であり、大型台風の影響も。土族による開墾はマラリア禍のため10年後に中止となり、中川の設立した「八重山糖業」も、マラリアに加えて2年連続の台風被害の結果、明治31(1898)年に解散となった。もっとも、農業に挫折した開拓移民のうち、一部は残留して町の中心地に進出、仁開家のように商業を開始した。石川島の商業の根幹は、彼ら残留組が築いたのである。



当時開かれた「シーナ原開墾地」に記された痕跡があった。

石川島「合衆園」に生きる人々

現在の石川空港の北、国道209号線の左右に広がる農地が、明治時代に琉球王府の農業士族たちが集団入植して開墾した「シーナ原」だといわれている。

現在の名蔵小中学校の真手のサトウキビ畑の隅にひっそりとたたずむ「地神宮」。明治時代に中川開墾地に入植した人たちが建立したものだ。



「最初の開拓移民は、首里の失業士族たち」三木 健著『八重山合衆園』の系譜(南山舎)によれば、琉球王府時代にも石川島や西表島には離島間の人口調整や税収確保のため「寄人制度」という強制移住の歴史があったが、明治時代になると、開拓民の出身地が「沖縄本島や遠く日本本土まで広がった」のだ。近代の集団入植の第一陣は、琉球が日本の沖縄県となったことで行き場をなくした失業

文さんに言わせれば、「島外の人には、地元の人と違い、情報を集めて直接本土から商品を仕入れたりと、商業熱心だった」からだ。ところで、石川島は今日でも最高人気移住地候補。島内を一周すると各地に新興居住区ができていくが、最近の動向はどうなのか?一夫さんに尋ねてみた。「ブームは過ぎましたが、問い合わせは首都圏をはじめ、まだ全国からあります」とのこと。そして、人気の理由を「気候の温暖さ、プラス島民が外來者に慣れ、誰でも受容する寛容さがあること」と述べた。



大正5年に撮影された「仁開敬介商店」。大豆やとうもろこしなど食料雑貨を扱い、後年は呉服店になった。戦後はミサワさんと文さんとで靴店「仁開商店」を営んだ。



仁開一夫さんの祖母にあたるミサワさん。96歳で亡くなるまで、「仁開のおばあ」として地元で知らぬ者のない存在だった。